立正大学博物館 館報

万言だより

MA GECHI NEWS

第14号 平成23(2011)年3月

歴史考古学と仏教考古学

館長 池上 悟

我が国に現在行われている慣用的な考古学の時代区分は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代を通有としており、より新しい時代を歴史考古学として一括している。知られるように、これらの時代名称には統一的配慮を欠くものである。

旧石器は伝統的な石器の製作法に基づく区分であり、新石器に対応する言葉である。縄文は土器の表面に印された縄目文様に由来するものであり、明治12年のEdward Sylvester Morseの"Shell Mounds of Omori"に記載されたCord marked potteryの訳語に由来する。弥生は向丘弥生町の土器が発見された貝塚の所在地の地名であり、古墳は地域支配者のための大規模な墳墓を指す。

このため、それぞれの時代に特徴的な土器名称で統一する試みも行われた。先土器時代・縄文時代・弥生時代・土師時代・続土師時代というものであったが、普及することはなかった。また、時代を画するに足る発見があった遺跡の所在地名で統一する試みも一部で実践されている。岩宿時代・大森時代・弥生時代であるが、古墳時代に代わる名称は提示されたことがない。明治期以降の本格的な古墳調査の嚆矢をもってすれば明治19年の栃木県足利公園古墳の調査であり、足利時代とせざるを得ないが中世の足利氏政権時代に重なり適切ではなかろう。またMorseとともに著名な大森貝塚は、大森に所在するものではなく、この点も問題となろう。

文字の記された文献史料が普及した古墳時代以降を、敢えて特徴的な考古資料で区分すると、古代は官衙・寺院の時代、中世は城郭時代、近世は都市の時代、近代は工場の時代となろうが、一般的には限定された分野しか検討できない考古資料を勘案して、独自区分はされていない。包括して歴史時代の考古学、歴史考古学と慣用的に用いられている。

仏教考古学は宗教考古学の一分野であり、仏教が伝播した地域において「仏教の歴史を考古学の方法によって闡明することを目的にしている」。

仏教考古学は、未だ歴史時代の考古学的調査が充分ではなかった戦前から、伝統的に歴史考古学の主要な部分を担ってきた。しかし昭和40年代以降の大規模調査は歴史時代における研究分野を大幅に拡大し、相対的には仏教考古学の位置が逓減してきている。

立正大学の考古学は、仏教系大学である特徴を重視して、歴史考古学・仏教考古学研究を推進されてきた。久保常晴博士は仏具・板碑などの仏教遺物の研究を推進され、前館長である坂詰秀一博士は奈良・平安時代の窯跡の調査を全国的に実践して研究の先鞭をつけられた。立正大学博物館には両博士の蒐集にかかる資料が多く所蔵されている。中世の板石供養塔婆である板碑、火葬骨壷である骨蔵器は特徴的な資料となっており、古代窯跡出土土器資料は全国に誇れる資料となっている。

第 7 回特別展
群集墳の時代～野原古墳群～

平成 22 年 11 月 29 日 (月) ～ 12 月 25 日 (土) にかけて、第 7 回特別展「群集墳の時代～野原古墳群～」を開催しました。

野原古墳群は、現在東京国立博物館に収蔵されている“踊る埴輪”の出土古墳として著名な古墳群で、埼玉県熊谷市の南端、和田川に南面する標高 45 ～ 50m の江南台地縁辺に所在します。昭和 37（1962）年に採土工事に伴う発掘調査で前方後円墳 1 基が調査されています。この前方後円墳で昭和 5 年、開墾中に“踊る埴輪”が出土したと伝えられています。この古墳は全長 40m、後円部径 16m、高さ 5m の規模で、後円部と前方部に凝灰岩の切石を用いて横穴式石室を構築した古墳であることが確認されています。

その後、熊谷キャンパス開設に先立ち、立正大学考古学研究室により昭和 39（1964）年に野原古墳群中の 8 基が発掘調査されました。平成 21 年 3 月に立正大学博物館より『館蔵資料「基礎文献」叢刊第 5 輯　埼玉県熊谷市　野原古墳群発掘調査報告』として報告されました。今回の特別展では、立正大学博物館所蔵および熊谷市教育委員会所蔵の野原古墳群出土品を中心に、埼玉県の群集墳について紹介しました。

群集墳とは、古墳時代後・終末期（5 世紀後半～ 7 世紀代）に小形円墳を主体に群集して造営される古墳群のことをいいます。また、古墳の表徴である墳丘を欠如する横穴墓も、副葬品・造営期間を考慮すると群集墳としての研究対象となります。

群集墳は、地域における在地首長墓を含めた古墳と関連して展開したもので、地方に展開した群集墳は各地域に等しく均一に展開せず、特定地域の特定地区を限って高塚群集墳および横穴墓が展開しており、それぞれ様相を異にしています。

また、群集墳内における個々の古墳の造営主体の造墓活動による集合状態を単位群としてとらえると、次の 4 類に分けられます。

第 7 回特別展チラシ

A1 類型：個々の墓域が明確に区分され一世代一基で、代々造営されるもの。

A2 類型：墓域が特定され同じ時期に複数の古墳を造営し代々造営されるもの

B1 類型：近接する複数の古墳が同時期に造営されるもの

B2 類型：B1 類型の同時期の複数の古墳が、幾つかの群を構成して継続的に造営されるもの

これらの群構成の違いとして認識できる単位群の 4 類型は、個別墓域の占有状況を視点として、群集墳造営集団中に占める造営主体、すなわち個別群集墳造営家族の存在状態の相違を顕現するところと考えられます。

今回の特別展では、特にこの群集墳における群構成に着目し埼玉県内および近隣における代表的な群集墳についてみていきました。取り上げた遺跡は、野原古墳群（埼玉県熊谷市）・立野古墳群（埼玉県熊谷市）・鹿島古墳群（埼玉県深谷市）・新屋

敷古墳群（埼玉県鴻巣市）・黒袴台遺跡古墳群（栃木県佐野市）・足利公園古墳群（栃木県足利市）です。

野原古墳群は湮滅した古墳を含め30基ほどの古墳群として想定され、A～Fの6単位群の存在が考えられます。調査された古墳の属する単位群は、C単位群以外では、A・D・Eの3単位群で、いずれも7世紀代に築造された古墳であることがわかっております。群構成は6世紀後半代のB1類型、7世紀前半代のA2類型の単位群の展開を確認でき、7世紀前半代を盛行期とする群集墳であることが確認できます。

立野古墳群は10基の古墳が確認され、A～Dの4単位群の存在が考えられます。群構成は顕著な格差を有さない個別造営主体の集合としてB2類の単位群として把握でき、7世紀後半代に盛行した群集墳であることが確認できます。

鹿島古墳群は、97基の古墳が確認され、うち36基が調査され、25基の横穴式石室が確認されています。横穴式石室の企画性や個別古墳の所産年代から単位群構成をみると、1～22号墳が集中する地点で、全体として複数の古墳が累代的に造営されたB2類型の単位群が考えられます。また、24～26号墳の4基では、2→1→1基の古墳が累代的に造営され、A2類型と想定することもできます。

新屋敷古墳群は77基の古墳が調査によって確認されました。時期はⅠa・Ⅰb・Ⅱ・Ⅲ期に分れ6世紀初頭～6世紀後半にかけての古墳群です。群構成は単位群の類型としてはB1類型として、総体としての集団墓の累代的な造営としてB2類型として把握できます。

黒袴台遺跡古墳群は、30基の古墳が調査によって確認されています。時期はⅠ～Ⅲ期に分れ、6世紀末～7世紀中葉の古墳群です。群構成はA～C群に分れ、A群はA2類型、B群はB2類型、C群はA2類型として捉えることができ、異なる様相の単位群の集合として形成された、終末期に造営の主体をおく古墳群です。

足利公園古墳群は、明治になって最初に、坪井正五郎博士によって学問的に調査された古墳群として著名でもあり、平成2～4年の調査で10基の古墳が確認されています。群構成は南北で単位群に区分でき、同時期に複数の古墳を造営したA2類型の単位群として考えられます。時期は6世紀後半～7世紀前半代と考えられています。

このように群集墳を群構成から見ていき、群集墳を造る集団の中で造営主体の存在状態の相違を想定でき、造営主体の造墓活動の累積としての単位群の様相の差異は、群集墳の性格の相違として認識されます。

特別展の関連事業として12月11日（土）に「埼玉の群集墳」と題して大谷徹氏（(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団）に記念講演会を行っていただきました。

また、大崎キャンパスの移動展示（パネルによる特別展の紹介）は平成23年1月6日（木）～29日（土）にかけて、大崎キャンパス5号館1階において行いました。

大谷徹氏の講演

資料紹介

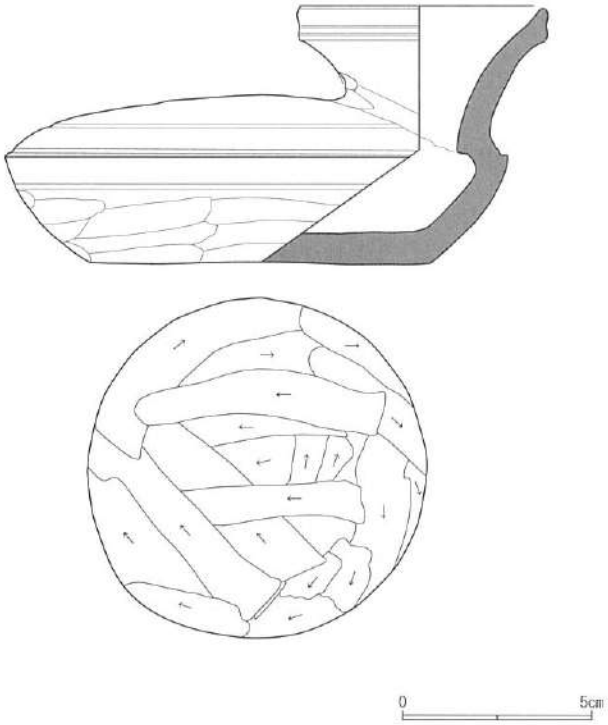
第７回特別展の会期中に野原古墳群の近くにお住まいの方から遺物を提示されました。子どものころから実家にあったものということで、野原古墳群から出土したものかどうかははっきりしないそうですが、時代やどういったものかということを教えて欲しいとのことで拝見しました。資料紹介の許可を頂き、今回報告することになりました。

遺物は、須恵器の平瓶で、大きさは高さ 6.8cm、最大幅 14.3cm、口径 6.4cm、胴部最大径 13.3cm、胴部最大高 4.4cm、底部径 9.0cm を測ります。色調は暗灰色で、一部黒灰色のところがあります。

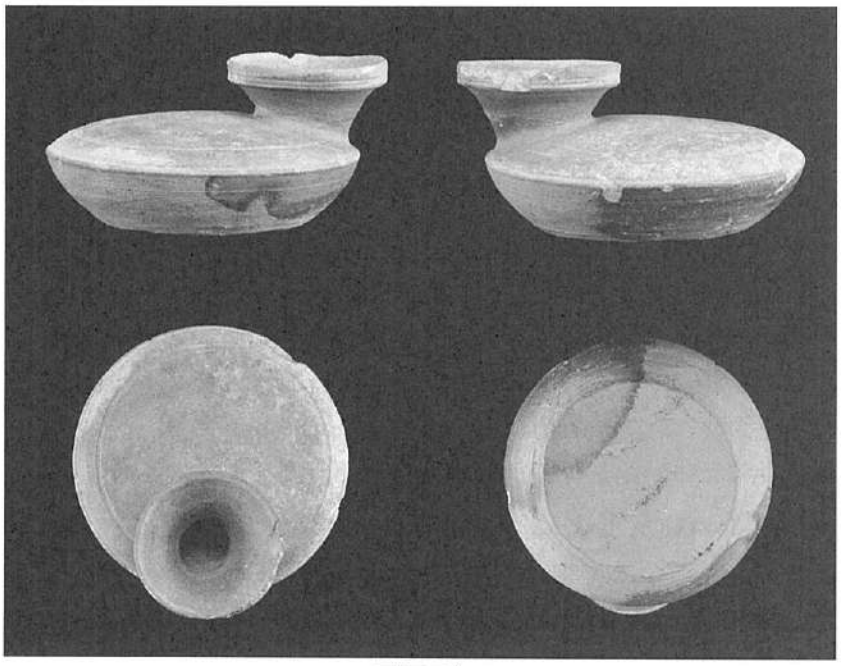
底部は全面をヘラ削りで調整し、体部外面ロクロ成形のあと、底部から 2.0cm ほどの範囲でヘラ削り調整を行っています。胴部最大径を測る高さ 2.8cm のところでドーム状に胴部を形成します。胴部上面の縁辺に幅 1.0mm の沈線を２段巡らしています。また、体部ヘラ削り調整の上に１段薄く沈線を巡らしています。頸部は外反して立ち上がり口縁部分は垂直に立ち上がり、この部分に２段の沈線を巡らせます。

平瓶は古墳時代後期(７世紀)から見られ始めます。平瓶が現れ始めたころは、胴部から底部まで全体的に丸みを帯びたものがあり、その後、体部上面はやや丸みを帯びたものの、胴部から体部上面にかけての肩部の稜が明確になり、底部は平になっていきます。また、頸部は時代とともに長大化する傾向にあります。さらに時代が新しくなると、小型化していき、体部上面に把手が付くようになります。

本資料は、やや小型で、体部上面はやや丸みが残るが把手は付かないものです。それらのことからみると、この資料の時期は８世紀中葉頃が考えられます。



平瓶実測図



平瓶写真

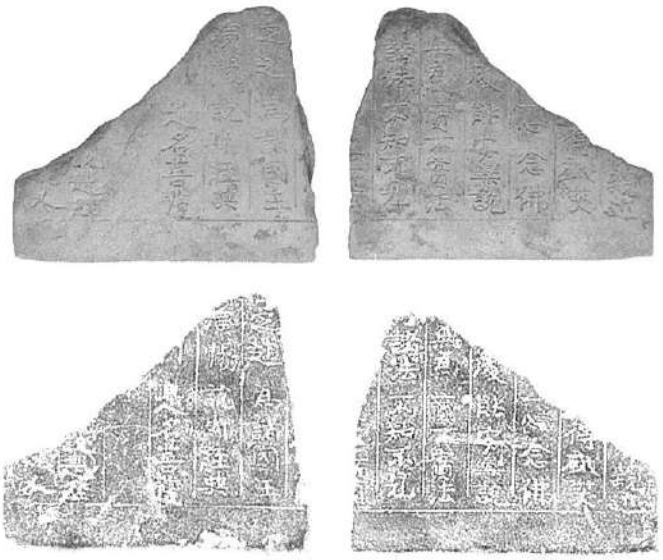
収蔵資料紹介

この瓦経は、前号（『万吉だより』第13号）で紹介した泥塔と同一の収納箱に納られていたものです。

瓦経とは、方形あるいは長方形の粘土板に、経文を記して焼成したものをいいます。末法思想のなかで、永く経典を残すために考えられたもので、兵庫県香寺町極楽寺経塚出土の瓦経などにそのような内容が書かれた願文が確認されています。

瓦経の片面には、経文などの周囲を囲む界線と行を区切る罫線が刻まれます。一般的に片面に15行、1行に17字程度の文字を書きます。書写される経文は、法華三経として開経である「無量義経」、「妙法蓮華経」、結経である「観普賢菩薩行法経」（観普賢経）、秘密三経として「大毘遮那成佛神変加持経」（大日経）、「金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経」（金剛頂経）、「蘇悉地羯羅経」、および「大楽金剛不空真実三摩耶経」（理趣経）、仏説阿弥陀経の八種類など様々な経典があります。また、真言や陀羅尼、曼荼羅、仏画なども書写されています。

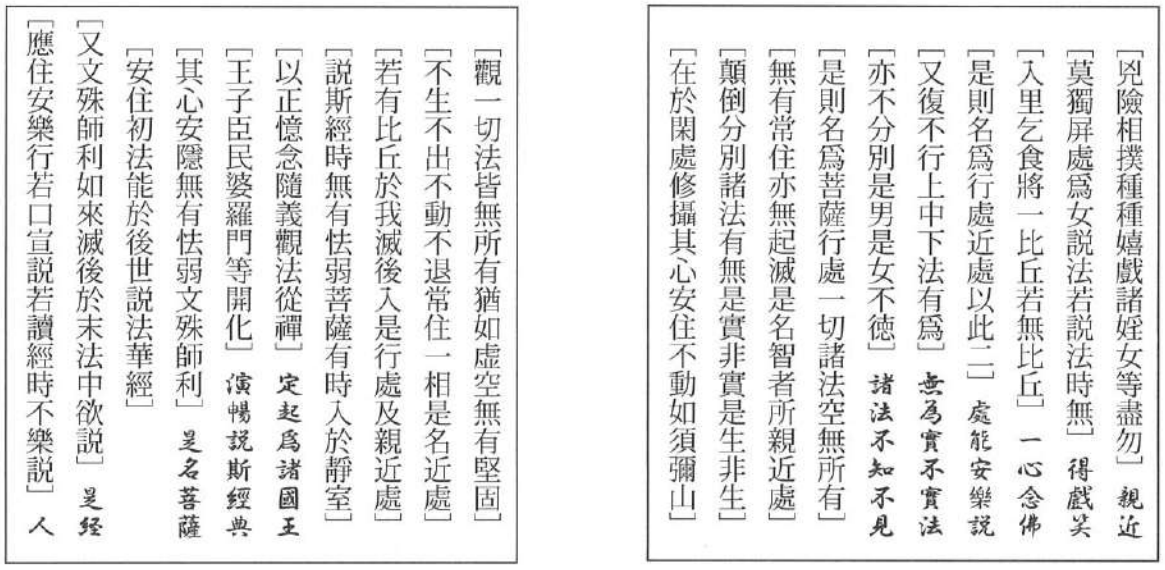
立正大学博物館所蔵の瓦経は、下部側面に墨書で「飯盛山」と書かれてあり、福岡県福岡市西区に所在する飯盛山経塚からの採集品であることがわかります。大きさは残存部横幅12.0cm、縦幅10.0cm、厚さ1.6cmを測り、色調は浅黄橙色を呈します。1行の幅は1.8cmあり、復元すると縦22.0cm、横19.0cmほどの大きさと推定できます。



瓦経写真と拓本（右側が表面、左側が裏面、縮尺は約1/3）

残存部分に見られる経文は下図の通りで、『法華経』巻5　安楽行品　第14の一文であることがわかります。

飯盛山経塚は、飯盛山山頂に瓦経が埋納された遺跡で、明治10（1877）年頃、江藤正澄により瓦経片34点が発見されています。その後大正13（1924）年に近くから経筒が発見されています。瓦経には永久2（1114）年の日付が書き加えられ、推定では、法華経206枚・無量義経24枚・観普賢経21枚・仁王経39枚・阿弥陀経6枚・般若心経1枚の計297枚が確認されています。



[觀一切法皆無所有猶如虛空無有堅固]
[不生不出不動不退常住一相是名近處]
[若有比丘於我滅後入是行處及親近處]
[說斯經時無有怯弱菩薩有時入於靜室]
[以正憶念隨義觀法從禪] 定起爲諸國王
[王子臣民婆羅門等開化] 演暢說斯經典
[其心安隱無有怯弱文殊師利] 是名菩薩
[安住初法能於後世說法華經]
[又文殊師利如來滅後於末法中欲說] 是經
[應住安樂行若口宣說若讀經時不樂說] 人
[兇險相撲種種嬉戲諸婬女等盡勿] 親近
[莫獨屏處爲女說法若說法時無] 得戲笑
[入里乞食將一比丘若無比丘] 一心念佛
[是則名爲行處近處以此二] 處能安樂說
[又復不行上中下法有爲] 無爲實不實法
[亦不分別是男是女不德] 諸法不知不見
[是則名爲菩薩行處一切諸法空無所有]
[無有常住亦無起滅是名智者所親近處]
[顛倒分別諸法有無是實非實是生非生]
[在於閑處修攝其心安住不動如須彌山]

瓦経経文（右側が表面、左側が裏面、行書体部分が残存部分）

NEWS

入館者数

平成23年1月6日から3月31日までの入館者数は56名です。

1月（17日間）…20名、2月（19日間）…28名、3月（17日間）…8名

平成22年度の総来館者数は2,012名で、内訳は一般1,036名、大学生448名、教職員19名、高校生以下125名、オープンキャンパス384名です。団体見学は、直実市民大学・桶川市民大学・上尾市文化財巡り・館林女子高等学校・藤岡中央高等学校・飯能南高等学校・熊谷市中央公民館審議委員会・大東文化大学オープンカレッジ・彩の国いきがい大学があり、その他に社会福祉学部・法学部のゼミ見学が4件ありました。

出版物

平成22年度下半期は、下記の出版物を刊行しました。

・第7回特別展図録『群集墳の時代～野原古墳群～』
・『万吉だより』13号
・『館蔵資料「基礎文献」叢刊　第6輯』

土器焼き

平成22年度の文学部史学科考古学専攻の考古学実習（4年生対象）において、土器作りを行い、土器の焼成場所として熊谷キャンパスで行うということで、博物館が協力しました。

11月6日（土）・7日（日）にかけて行い、焼成は野焼きと覆い焼きを行いました。考古学実習担当の竹花宏之先生（文学部非常勤講師）の指導の下、6日（土）に事前準備を行い、7日（日）に土器焼成を行いました。実習生は6人で、それぞれ高さ30cm程度の縄文土器を1点づつ製作しました。また、補助として参加する大学院生も土師器の坏や縄文土器を作成し合計20点ほどの土器を焼成しました。焼成する点数が少ないこともあり、焼成用の穴は径180cm程度の野焼き用のものと径120cm程度の覆い焼き用の2種を用意しました。6日は穴の準備と覆い焼き用の藁灰を作成し作業を終えました。

7日は、まず野焼きの火床を作りながら覆い焼きの準備を進め、覆い焼きのほうを最初に行いました。資材は、藁・薪（校地内の枯れ枝など）を

覆い焼き

各軽トラック1台分用意し、薪とは別に赤松材を購入しました。

覆い焼きは、薪などの上に土器を並べ、その上から藁・萱などで全体を覆い、藁灰を全体に被せて14時間ほど燃焼させる方法です。

野焼きは、火床を製作し温度が上昇したところで土器を並べ、薪をくべながら焼成していきます。最後に藁・萱などで炭化物を焼き払い仕上げます。火床を作っている間、火床の周辺に土器を並べ徐々に焼成していきます。

午前8時より作業を開始し、野焼きは午後2時ごろに終え、覆い焼きを5時ごろに終えました。

覆い焼きは通常14時間前後の焼成が必要ですが、今回は日程の都合などにより9時間で焼成を終わらせたので、焼成時間の不足と温度があまり上がらなかったこともあり上手く焼成できませんでした。

野焼きで焼成した土器は、火床に並べてから2～3時間で完成し、破損なども無く焼成できました。

今年度から始まった土器製作ですが、なかなか上手い具合にいかないところもあり、次年度以降に改善していきたいと思います。

また、資材において藁を提供して頂いた上山氏にこの場をかりてお礼申し上げます。

野焼き

見学者の声

当館では、来館者の皆様の皆様の意見を反映する為メッセージ箱を備えております。下記のご意見は寄せられたご意見から事務局で集約したものです。貴重なご意見ありがとうございました。今後の博物館運営に役立たせて頂きたいと思います。

・群集墳というのがどういったものなのか理解することが出来ました。

（県内・本学学生・20 代男性）

・特別展を見に来ました。踊る埴輪がかわいかったです。

（県内・本学学生・21 代女性）

・釋迦の時代の資料が展示してあって驚きました。その他にも色々な資料があり良かったです。

（県内・一般・40 代男性）

・第 1 展示室にあった大きい黒曜石の原石がすごかったです。

（県内・一般・50 代女性）

・群集墳の展示をみにきました。少し内容が難しかった気がしますが、良かったです。

（県内・一般・60 代女性）

・自分の住んでいるところの近くの遺跡の資料があり、興味深く見学させて頂きました。

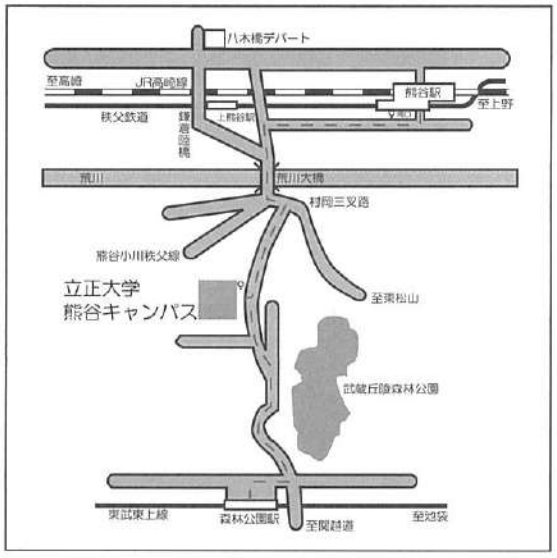
（県内・一般・60 代男性）

利用案内

所在地：〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL　048 － 536 － 6150
FAX　048 － 536 － 6170

開館日：月・水・木・金・土曜日（大学休業中を除く）
開館時間：　10：00 ～ 16：00
※休館日（火・日・祝日）及び大学休業中（夏・冬・春期休暇等）に見学を希望する方は、事前に博物館あるいは総務部総務課（048 － 536 － 6010）にご連絡下さい。

交通機関：① JR 高崎線、上越・長野線幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 10 分。
②東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 12 分。



あとがき

3 月 11 日（金）に東日本大震災が起こりました。博物館も展示資料が転倒しましたが、破損したものは少数で被害はほとんどありませんでした。その後のニュースでみる宮城・岩手県の多大なる被害状況に呆然としました。復興にどれだけの時間がかかるかわかりませんが、自分の出来ることから支援・協力をしていきたいと思います。被災地の方々にお見舞い申し上げます。

（内田）

題字揮毫　田淵観斎（立正大学名誉教授）

立正大学博物館館報　万吉だより　第 14 号
平成 23（2011）年 3 月 20 日発行
編集・発行　立正大学博物館
〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL 048 － 536 － 6150
FAX 048 － 536 － 6170
E-mail ： museum@ris.ac.jp
URL ： http://www.ris.ac.jp/museum/index

（印刷：光写真印刷株式会社）